

いのち
生命のにぎわい調査団
生命のにぎわい通信

発行：千葉県環境生活部自然保護課
千葉県生物多様性センター
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2
(千葉県立中央博物館内)
TEL 043-265-3601 FAX 043-265-3615
URL <https://www.bdcchiba.jp/monitor/>
E-mail monitor@bdcchiba.jp

第61号：発行 令和4年(2022年)1月

生きものたちの冬越し

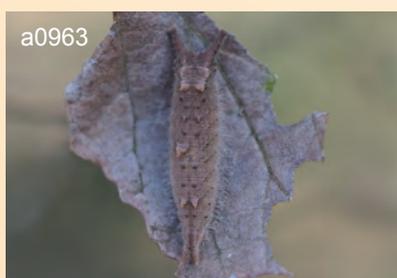
餌が枯渇し、寒さが厳しくなる冬期は、多くの生きものたちが人目に付かない場所でひっそりと冬越しをしています。さて、皆様は生きものたちがどのような環境で厳しい冬を乗り越えているのかご存知でしょうか。今号では、千葉県内に生息する9種の生きものをピックアップし、様々な冬越しについて紹介します。



a0389

集団越冬するテントウムシ

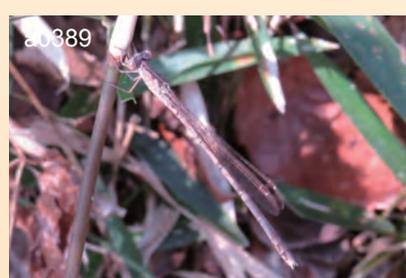
ナミテントウやカメノコテントウ等は、風が当たらず、温度変化の小さい石の割れ目、木のうろや壁の隙間等に、たくさん個体が集まって集団越冬します。



a0963

落葉で越冬するゴマダラチョウ

オオムラサキやゴマダラチョウの仲間は、幼虫の状態でも木の根元に溜まった落葉の下に潜って越冬します。落葉に同化するような体色と模様をしています。



a0389

枝で越冬するイトトンボ

ヤゴで越冬する多くのトンボと異なり、ホソミオツネイトンボは成虫で越冬します。風当たりの少ない林縁にある小枝等に掴まるようにして冬を越します。



a0389

土中で越冬するサンショウウオ

トウキョウサンショウウオは水中に産卵し、幼生の間は水中で生活しますが、変態後は陸上生活に移行します。成体は土中に潜り、越冬します。



a1514

水中で越冬するカメ

ニホンイシガメ等は淵に堆積した落葉の下や岩の隙間、川岸の横穴等で越冬することで、捕食者から逃れたり、乾燥や凍結による死亡を防いでいます。



a0389

洞窟で越冬するコウモリ

キクガシラコウモリ等のコウモリたちは、洞窟等の温度や湿度が安定した暗い場所で、息をひそめて冬をやり過ごしています。



a0826

日本で越冬する鳥

越冬のため、遠く日本に移動してくる鳥類もいます。ツグミは繁殖地のロシア極東から平地や山地の林や、農耕地や公園等の開けた環境へ冬越しに訪れます。



a0963

チャバネフユエダシヤク：メス

冬に活動するフユシヤク

フユシヤクの仲間は冬期に活動する珍しいガです。オスは普通のガのような形態をしている一方で、メスは翅が退化しているために奇妙な見た目をしています。



a1513

ロゼットで越冬する植物

ギンギン等の一部の多年草は、地表付近に葉を放射状に広げたロゼットの状態で越冬します。冬期に光合成をすることで、暖くなった春にいち早く成長できます。

*写真左上は撮影者の団員番号です。一部の写真ではトリミングを行いました。

最新の生物多様性に関する情報、各種研修会の情報は、当センターと調査団のホームページをご覧ください
「調査団」 <https://www.bdcchiba.jp/monitor/index.html> と 「生物多様性センター」 <https://www.bdcchiba.jp/>

古典文学と里山の生き物たちの世界



第十五回 オシドリ

Aix galericulata カモ目カモ科



詩人 大島 健夫

日本の古典文学には、様々な生き物たちが様々な形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生き物とかかわり、その姿に何をしていたのでしょうか。この連載では、生物多様性センターに勤務している、ポエトリー・スラム W 杯日本代表詩人の大島健夫が、^{いのち}生命のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

ある日、陸奥の国の赤沼というところで猟師がつがいのオシドリを見つけ、雄の方を射る。その夜、猟師の夢の中に美しい女性が現れてさめざめと泣き、「昨日赤沼で、長いこと連れ添った私の夫が罪もないのに射殺された、あまりにも悲し過ぎて私も生きていくことができない」と言い、和歌一首を残して去ってしまう。そして翌日、赤沼で猟師が見たものは、雄のオシドリの死骸の傍らで、雄の嘴を自分の嘴でくわえて死んでいる雌のオシドリだった。これを見た猟師は世をはかなんで出家する・・・。

これは、鎌倉時代に^{へんさん}編纂された説話集、「^{ここんちよもんじゅう}古今著聞集」に、「^{うまのじょうながしむつくに}馬允某 陸奥國赤沼の^{おしどり}鴛鴦を射て出家の事」と題して収録されている話ですが、ほぼ同じような内容の伝説は日本各地に流布しており、「古今著聞集」とだいたい同世代に成立した仏教説話集「^{しゃせきしゅう}沙石集」にも、同様の話が収録されています（古今著聞集では舞台が東北地方なのに対し、沙石集では^{しもつけ}下野の国、つまり栃木県になっています）。

後年、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が、これらの話をもとにして「おしどり」という短編を書きました。そこでは、雌のオシドリが猟師の前で嘴で自分の体を突き破って自殺する、というより劇的な展開になっています。オシドリは、「おしどり夫婦」とか「鴛鴦の契り」とかいて、古くから夫婦仲の良い生き物の代表格として扱われてきました。確かに、繁殖期のオシドリはどこへ行くにも雌雄一緒に行動し、雄の美しい羽とあいまってたいへん仲睦まじく見えます。



作 齋藤倫瑠

しかし、実際には彼らは、「長いこと連れ添った」りはしないのです。

子育ての時期になるとペアは解消され、育児は雌が単独で行います。その時期には雄の美しい飾り羽も抜け落ち、雌とほぼ同じ姿になってしまいます（これを「エクリプス」といいます）。そして季節がめぐり、また繁殖期がやってきたとき、彼らがそれぞれ選ぶのは、前年と同じパートナーとは限りません。つまり、オシドリの夫婦関係とは、たった半年間ほどのものでしかないのです。「お宅はおしどり夫婦でいらして」などと軽々しく口にするのは、若干の危険を伴っているかもしれません。

<これからの季節に観察できる生きもの>

- 調査対象種：イタチ、キジ、アカガエル類（卵）、トウキョウサンショウウオ（卵）
- 調査対象種以外
 - * 渡りのシギ・チドリ類、コガモやトモエガモなどのカモ類
 - * ホソミイトンボやカメノコtentウなどの越冬する昆虫類

調査対象種以外は種の同定が難しいため、できるだけ写真の添付をお願いします。

「生命のにぎわい調査フォーラム」のご案内

生命のにぎわい調査フォーラムを開催します。調査団員の活動報告や写真コンテストを行いますので、多くの方のご来場をお待ちしています。

日時：令和4年3月5日（土）午後1時30分～4時

場所：千葉県立中央博物館 講堂

定員：先着70名・参加無料（事前登録が必要です）

なお、新型コロナウイルス感染症の状況により、中止や延期等、開催内容に変更が生じる場合があります。予めご了承ください。

同時開催！ 生命のにぎわい写真コンテスト

詳細は当センターのホームページやチラシをご参照ください。